二〇二四年一一月二九日

灯点りて峡の底ひの暮易し　澄子
ポインセチア胸に抱へし家路かな　むべ
海の日を纏ひ播磨の山眠る　せいじ
小春日や抱く子につられ大欠伸　ほたる

二〇二四年一一月二八日

照紅葉乳鋲錆びたる大手門　やよい
沐浴に眠る赤子や冬ぬくし　康子
懸大根帯なす軒や里の道　むべ
窓磨く胸に冬日の留まりぬ　むべ
野葡萄は森の宝石とぞ思ふ　うつぎ
大玻璃の紅葉に染まる京料理　なつき
靴下にホッカイロ敷き畑仕事　千鶴
歯医者から美容院へと我れ師走　たか子

二〇二四年一一月二七日

回覧板干し柿一つ添へ置かれ　よし女
軽トラを皆で押し上ぐ刈田かな　山椒
濠映ゆる銀杏黄葉の銀河めく　やよい
みちくさす落葉に車椅子を止め　あひる
さしのべし手に綿虫の一休み　明日香
みどりごの大き欠伸や日向ぼこ　康子

二〇二四年一一月二六日

石組みの粗なる城址やもみぢ散る　はく子
星散らし焼くクッキーやクリスマス　あひる
猿廻し拍手喝采城小春　やよい
御所の砂利母娘で踏んで冬ぬくし　千鶴
詮無くも男手が欲し冬支度　たか子

二〇二四年一一月二五日

散歩道釣瓶落しの影法師　風民
無農薬とて虫付きの菜を洗ふ　明日香
足裏よし踏む音もよし落葉道　明日香
掛け合いのやうに咳する夫と吾　康子
熟柿もぐ玉子のように手渡しに　よし女
老い夫の自立訓練りんご剥く　あひる
金の鈴空より降らむ棟の実　風民
夫剥きし林檎彫刻めきにけり　あひる

二〇二四年一一月二四日

落日に染まる軒端の柿すだれ　風民
黄落の道もとほれば日の温み　むべ
匕首の月上げて冬山黒屏風　むべ
境内を隈なく銀杏黄葉敷く　こすもす
来たよ来た白鳥が来た朝日燦　和繁

二〇二四年一一月二三日

仕舞湯に浸りて柚子と遊びけり　うつぎ
秋夕焼光背として摩天楼　山椒
紅葉影乱して鯉の跳ねにけり　董雨
冬麗や花舗の店頭占むビオラ　あひる

毎日句会みのる選・二〇二四年一二月一日